

子供たちが多様化する中で
紙ベースの一斉授業は限界

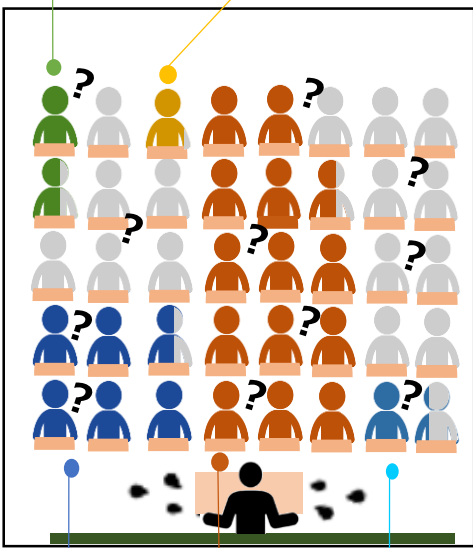


多様な子供たちに対してICTも活用し
個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実

発達障害

※「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」(H24)

Gifted



不登校
不登校傾向

日本語を家で
あまり話さない子供

家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供
(語彙や読解力の低下は重要な教育課題)

教師による一斉授業
一定のレベルを想定した授業展開

主体

子供主体の学び
子供の理解度や認知の特性に応じて自分のペースで学ぶ

同じ教室で
集団行動が基本となる教室で

空間

教室以外の選択肢
教室になじめない子供が教室以外の空間でも

同一学年で
同一学年で構成され該当学年の学び

**学校種
学年**

学年に関係なく
学年・学校種を超える学びや学年を遡った学びも

教科ごと
教科担任制のもと教科ごとの指導

教科

教科横断・STEAM
教科の本質の学びとともに、教科の枠組みを超えた実社会に生きる学びを

Teaching
指導書のとおり計画を立て教える授業

教師

Coaching
子供の主体的な学びの伴走者へ

同質・均質な集団
教員養成学部等を卒業し、定年まで勤めることが基本万能を求められる教師

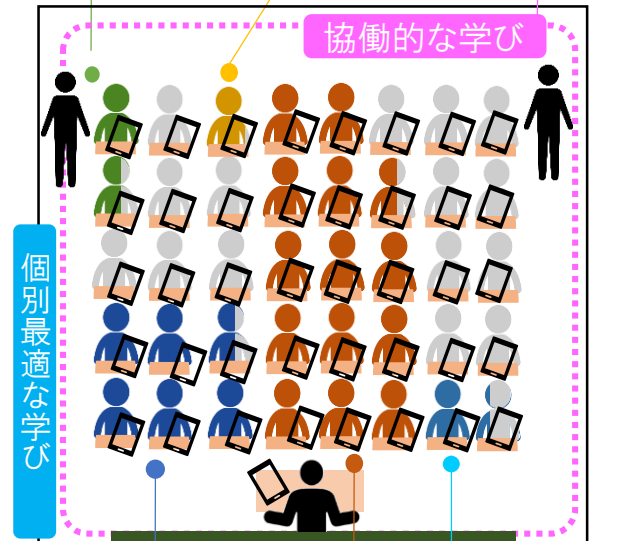
**教職員
組織**

多様な人材・協働体制
多様な教職員集団理数、発達障害、ICT、キャリアなど専門性を活かした協働体制

発達障害
認知の特性を自ら知るとともに、周囲も理解し支援しながら、自分のペースで学びを進めることができる

Gifted
特異な才能のある分野を伸ばすため、大学や研究機関で学ぶことができる

家庭や経済力、認知の特性や興味などが異なる子供たちが「協働」で学ぶ機会の確保が公教育の肝(協働的な学びの重要ツールが情報端末であり、そのためには情報モラルが重要)



個別最適な学び

協働的な学び

不登校・不登校傾向
公立オルタナティブスクール(教育支援センター、不登校特別校、夜間中学とNPO等が連携)、フリースクール、適応指導教室などで学ぶことができる

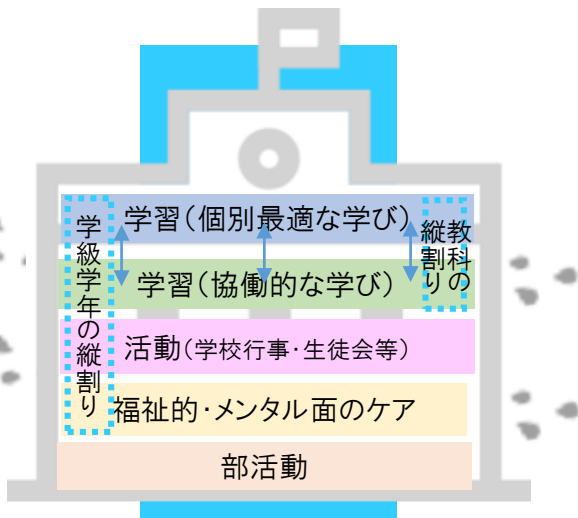
日本語を家であまり話さない子供
特別なカリキュラム組み、ICTも活用しながら、日本語習得と同時に学びを進めることができる

家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供
タブレット等の活用により自分のペースで着実に自分の理解に応じて学びを進めることができる

※限られたリソースの中、個別最適な学び・協働的な学びを追求している学校や教師も沢山いるが、現リソースでは一般的に限界があることを想定して図式化したもの

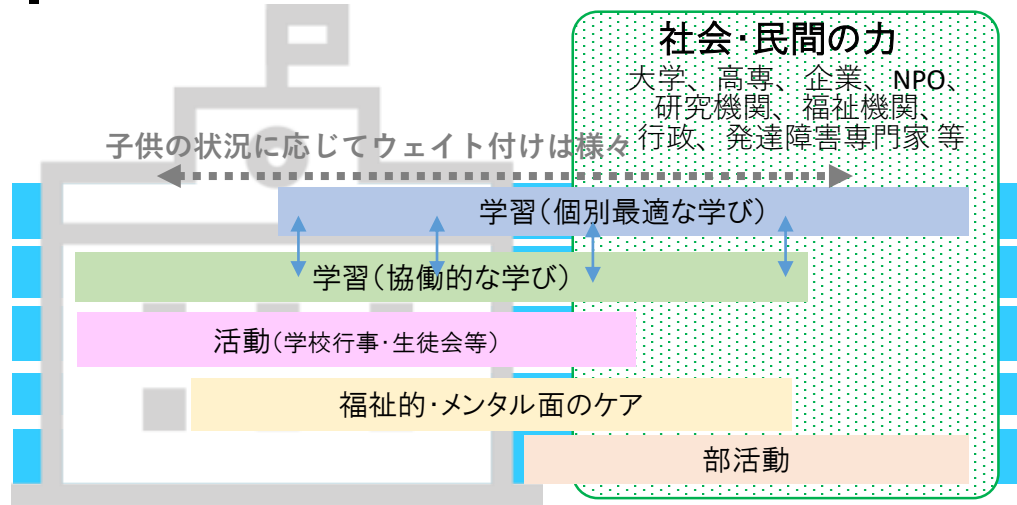
(参考)教育DX:学校のあるべき姿とは(たたき台)

すべての分野・機能を一学校が丸抱え状態



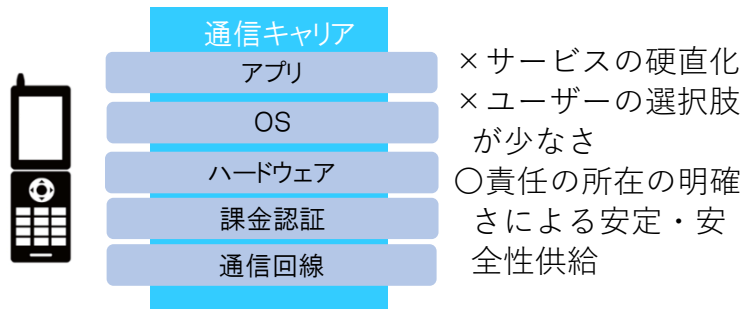
- 学級という集団の中で質の高い一斉授業を行うことにより、体系的なカリキュラムの実施や対話や協働を重視した学びが可能
- 学校の責任のもと、教科指導、特別活動、部活動などを通して全人的教育を行い、福祉的機能も担う
- ×手続き的・形式的な公正やルールが重視され、過度の同調性や画一性をもたらすことも
- ×子どもたちの認知の特性や関心に応じた個別性の高い教育を実現するためには、時間や人材などのリソースが十分ではない

分野や機能ごとにレイヤー構成、様々なリソースを活用

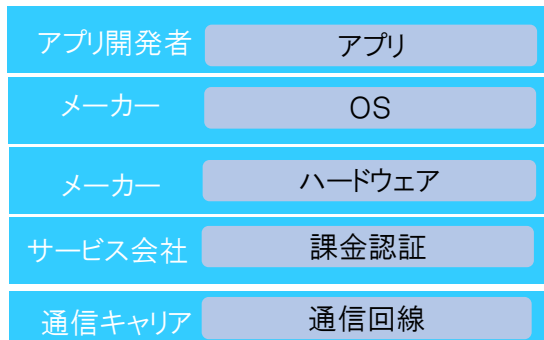


- ×学び方が時間的に空間的にも多様化すると、学びの体系性や集団としての教育の機能が弱くなる可能性
→ スタディログなどにより子供の学びを教師が把握し伴走するとともに、協働的な学びの場を確保する必要
- ×学びや体験活動などの実施主体や責任の所在が不明確になる可能性
→ 学び全体はスタディログ等で学校が把握・支援するとともに、活動ごとの責任の所在や情報の管理主体の明確化が必要
- ICTも活用し、自分のペースで学びを調整したり、学校外のリソースを活かした学びを進めたりすることが可能
- 多様や教職員集団や様々な学校外のアクターが関わることにより、子供たちの認知の特性・関心により応じた教育の展開が可能

参考



- ×サービスの硬直化
- ×ユーザーの選択肢が少なさ
- 責任の所在の明確さによる安定・安全性供給



- ユーザーによる最適化
- 専門化で質の向上
- ×責任の所在の不明確さ

Demand Side

子供	多様な背景や認知特性等を含めた子供たちの多様化 (特別支援、不登校、特異な才能のある子供、日本語指導、貧困等)							
	学校生活の満足度の低下 「楽しいと思える授業が沢山ある」 74.8% (中1) 69.2% (中3) 66.3% (高1) 56.4% (高2)			自分で社会や国を変えられると思う 18.3% (18歳) (中国65.6%、印83.7%)		経済界 <求める資質・能力> 数理的推論・データ分析力、論理的文章表現力、外国語コミュニケーション力等、論理的思考力と規範的判断力、課題発見・解決能力、未来社会の構想・設計力、高度専門職に必要な知識・能力		
	理数の学力は世界トップレベル TIMMS2019 (小4) TIMMS2019 (中2) PISA2018 (高1) 理科 4位/58か国 理科 3位/39か国 科学的リテラシー2位/37か国 算数 5位/58か国 数学 4位/39か国 数学的リテラシー1位/37か国			理科や算数・数学はあまり楽しくない 小4 日本 (国際平均) 中2 理科楽しい 92% (86%) 70% (81%) 算数・数学楽しい 77% (84%) 56% (70%)		理数離れ加速 ・普通科7割 →うち文系7割 →うち物理履修は2割		先細る理系人材 【学部】 人社系 5割 理工農系 2割
	中→高で理系志向の割合は増えず、文系志向のみが増 理系を意識 中3 31% (男子41%、女子19%) → 高3 31% (男子40%、女子20%) 文系を意識 31% (男子20%、女子44%) 51% (男子42%、女子62%)							
忙しい、好きなことをする時間がもっとほしい 好きなことをする時間がもっとほしい 忙しい 51.2% 64.8% 70.4% 80.5% 86.3% 84.9%								

人材の質的・量的需給のミスマッチ

Supply Side

	就学前	小学校	中学校	入試	高等学校	入試	大学	社会 (企業等)	
教育内容 (ソフト時間)	新学習指導要領実施 (資質・能力ベース、教科等横断的な学び、社会に開かれた教育課程の実現) 具体 → 抽象化・高度化 授業時数の設定 (R4~標準授業時数の一定の弾力化を認める特例実施) 個別最適な学びに向けたICT・データ活用が課題					普通科7割、文理コース分け 総合的な探究の時間 理数探究 (R4~)		社会との連携・協働による社会に開かれた教育課程の実現	
教職員 (ヒト)	教員の多忙化、長時間勤務による疲弊 学級担任制 (全教科指導) 持ちコマ数の多さ 文系出身の教員中心 理科指導への苦手意識強め					教科担任制 教科担任制			GIGAスクール構想 (1人1台端末整備) 実現 →定期的な端末更新の必要 安定したネットワーク環境の必要、GIGAスクール構想を踏まえた統合型校務支援システムの整備の在り方 老朽化に伴う校舎の建て替え
学校 (ハード)	教員採用倍率の低下、教員不足					保護者負担 (BYOD) 含めた端末整備の推進			